

『危険見つけてみんなで改善 意識高めて安全職場』

今年で88回目になる全国安全週間は、労働災害を防止するための産業界での自主的な活動を推進するとともに、職場での安全に対する意識を高め、安全を維持する活動の定着を目的としています。

例えば経験の浅い労働者は、職場に潜む危険要因に気が付きにくいので、事故に遭遇する危険性が高まります。そこで、安全な職場環境を維持するには、同じ職場にいる労働者全員で危険要因をいち早く見つけ出し、事故発生を未然に防ぐことが重要です。

また熱中症予防に関しても、厚生労働省より各都道府県労働局長に毎年熱中症による死傷者数が多い建設業や製造業に対して、下記のように啓発・指導を促すよう通達がありました。

● 製造業での熱中症予防対策の重点事項【次の2項目を重点事項として、熱中症予防対策に取り組むこと。】

- ①事前にWBGT予測値・実況値や高温注意情報等を確認し、作業中に身体作業強度に応じたWBGT基準値を超えることが予想される場合には、作業計画の見直し等を行うこと。
- ②水分及び塩分の摂取確認表を作成する、朝礼等の際に注意喚起を行う、頻繁に巡視を行い確認する等により、作業者に、自覚症状の有無に関わらず水分及び塩分を定期的に摂取させること。



● 製造業での具体的な実施事項【一部抜粋】

【作業環境管理】

- ・熱源がある作業場所では、スポットクーラー又は大型扇風機の使用等、WBGT値の低減を図ること。
- ・休憩時間をこまめに設けて連続作業時間を短縮するほか、WBGT値が最も高くなり、熱中症の発症が多くなり始める14時から16時に長目の休憩時間を設ける等、作業者が高温多湿環境から受ける負担を軽減すること。
- ・高温多湿作業場所で初めて作業する作業者については、順化期間を設ける等配慮すること。

【作業管理】

- ・作業中は、作業者の様子に異常がないかどうかを確認するため、管理・監督者が頻繁に巡視を行うほか、作業者同士で声を掛け合う等、相互の健康状態に留意させること。

【健康管理】

- ・作業者に睡眠不足、体調不良、前日に飲酒している、朝食が未摂取である等の状況や、感冒等による発熱、下痢等による脱水等の症状がみられる場合、熱中症の発症に影響を与えるおそれがあることから、作業者に対して日常の健康管理について指導するほか、その症状等が顕著にみられる作業者については、作業場所の変更や作業転換等を行うこと。

【労働衛生教育】(繰り返し行い、日々の注意喚起を図る)

- ・作業者の自覚症状に関わらない水分及び塩分の摂取
- ・日常の健康管理
- ・熱へのばく露を止めることが必要とされている兆候の把握
- ・緊急時の救急処置及び連絡方法


【救急措置】

- ・熱中症を疑わせる症状が現れた場合は、涼しい場所で身体を冷し、水分及び塩分の摂取等を行うこと。また、必要に応じ、救急隊を要請し、又は医師の診察を受けさせること。

WBGT (湿球黒球温度) …人体と外気との熱のやりとり(熱収支)に着目した指標で、①湿度②日射・輻射(ふくしゃ)など周辺の熱環境③気温の3つを取り入れた指標です。(環境省の『熱中症予防情報サイト』で全国約850地点の2日先までのWBGT値(暑さ指数)の予測値・実況値を見ることができます。)

第四十二号 (7月号)

梅雨明けにはまだしばらくかかりますが、梅雨が明ければよいよいよ夏本番です。熱中症対策は万全に、突然の大雨や雷雨にも注意しましょう。



～ 今月の予定 ～

<p>『海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う』</p> <p>祝日となる前は、『海の記念日』という記念日でした。その由縁は、明治天皇が東北地方へ行かれる際に、初めて軍艦でない艦船で航海をし、七月二十日に横浜港に帰着なさったことだそうです。</p>	<p>『海の国民の休日』</p> <p>「海の日」七月二十日(第3月曜日)</p>	<p>8日(水) [岡山] 製造会議</p> <p>9日(木) [本社] 総務会議</p> <p>11日(土) [本社] 営業・製造会議</p> <p>15日(水) 夏期賞与</p> <p>16日(木) [本社] 品質会議 ※15~17日 (本社にて技術指導) 橋本さん、小田さん</p>
--	---	--

月間重点目標

整理、整頓、清掃

自身の心は清潔に!

(by 末金さん)

うるう秒って? 8:59 → 8:60 → 9:00

地球の自転速度が厳密には一定ではないために起きる「時間のずれ」を調整するための1秒。数年に1度、1/1か 7/1 の午前0時直前(日本時間は1日午前9時直前)、世界同時に挿入される。

1972年から始まり、数年に一度挿入され、今回は3年ぶり26回目になる。以前、うるう秒はあまり問題視されなかったが、近年のコンピューターの進化で1秒当たりの処理能力が高まった上、ネットワークの発達によって多くの機器が相互接続され、企業などの大規模なシステムへの影響が懸念されるようになった。実際前回の2012年には飛行機の機器トラブルやSNSのシステム障害などが起きた。千分の1秒単位で注文が飛び交う東証では、今回、1秒を午前7時からの2時間(7200秒)に分散して調整する。今回は18年ぶりに平日に当たるので、総務省やNICT(*)では説明会や情報提供などを事前に行っており、大きなトラブルは起きないと予想されますが、この1秒のために多くのシステム担当者が準備に追われることから、今後のうるう秒の実施については廃止論も出ている。

ちなみに、うるう秒が廃止されると、この遅れは600~700年後には30分~1時間になる見通し。

(*NICT…日本の標準時を管理する“情報通信研究機構”)